

GB521

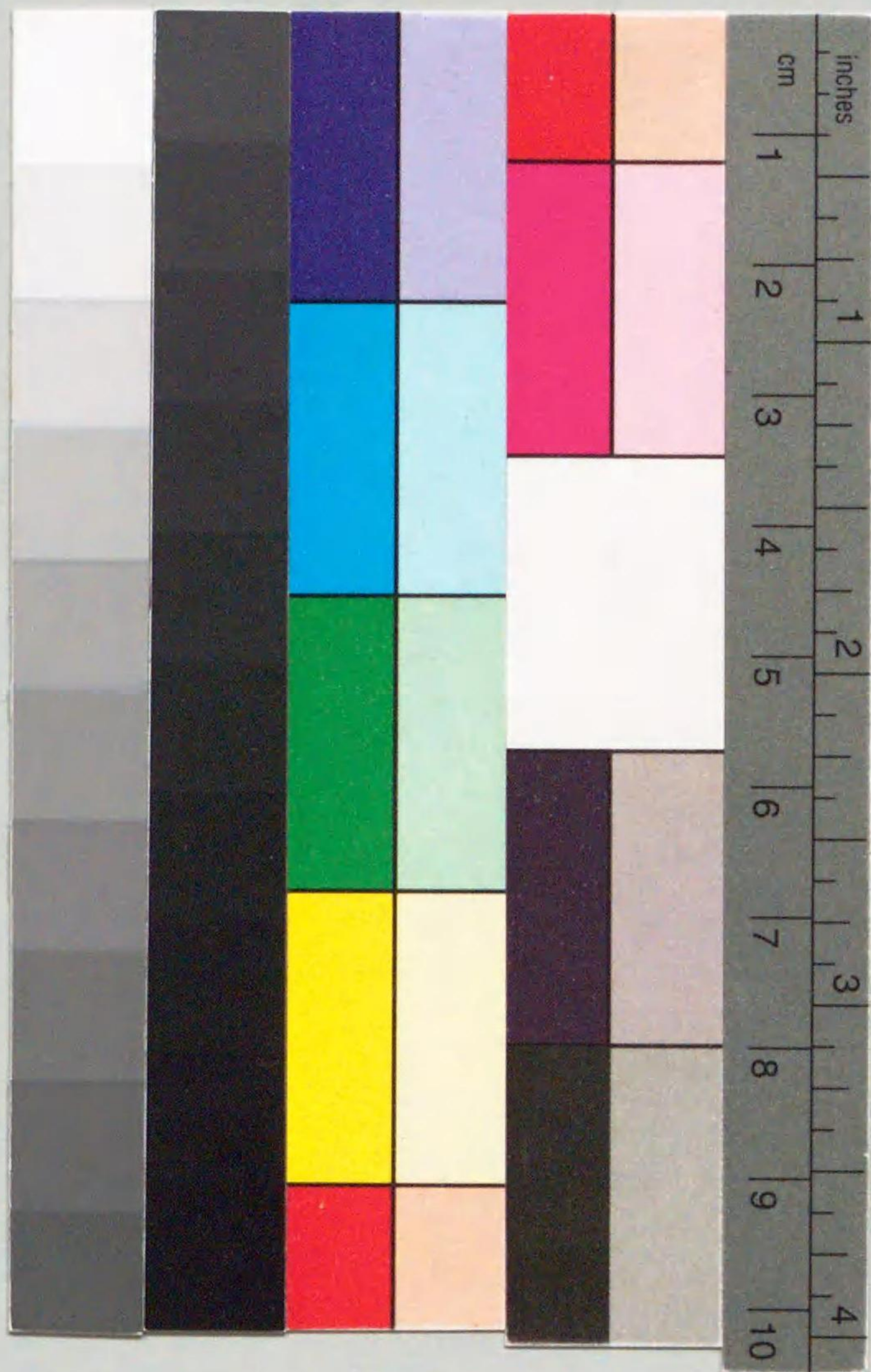
57

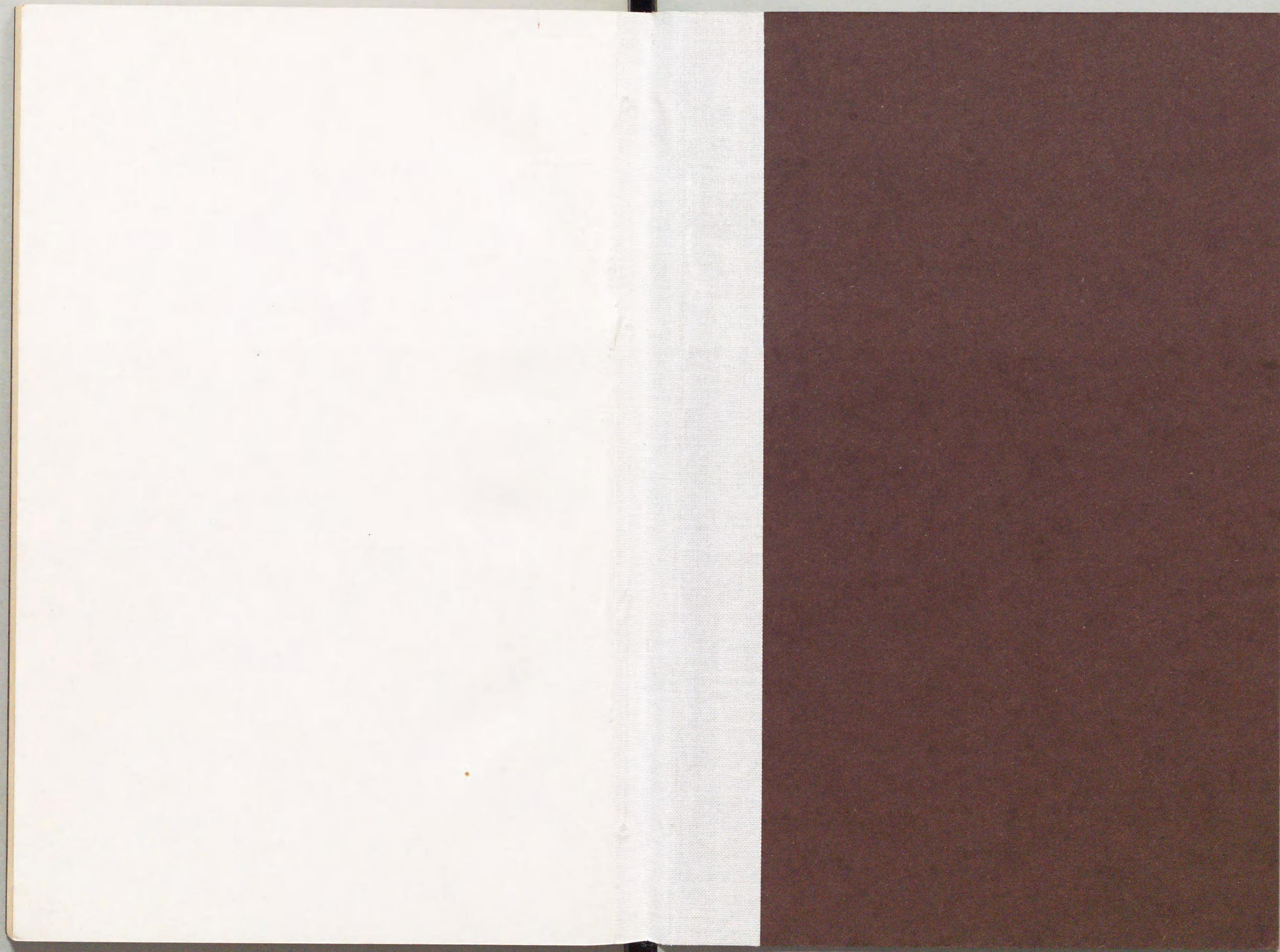


00929214

昭和日本の使命

国立国会図書館



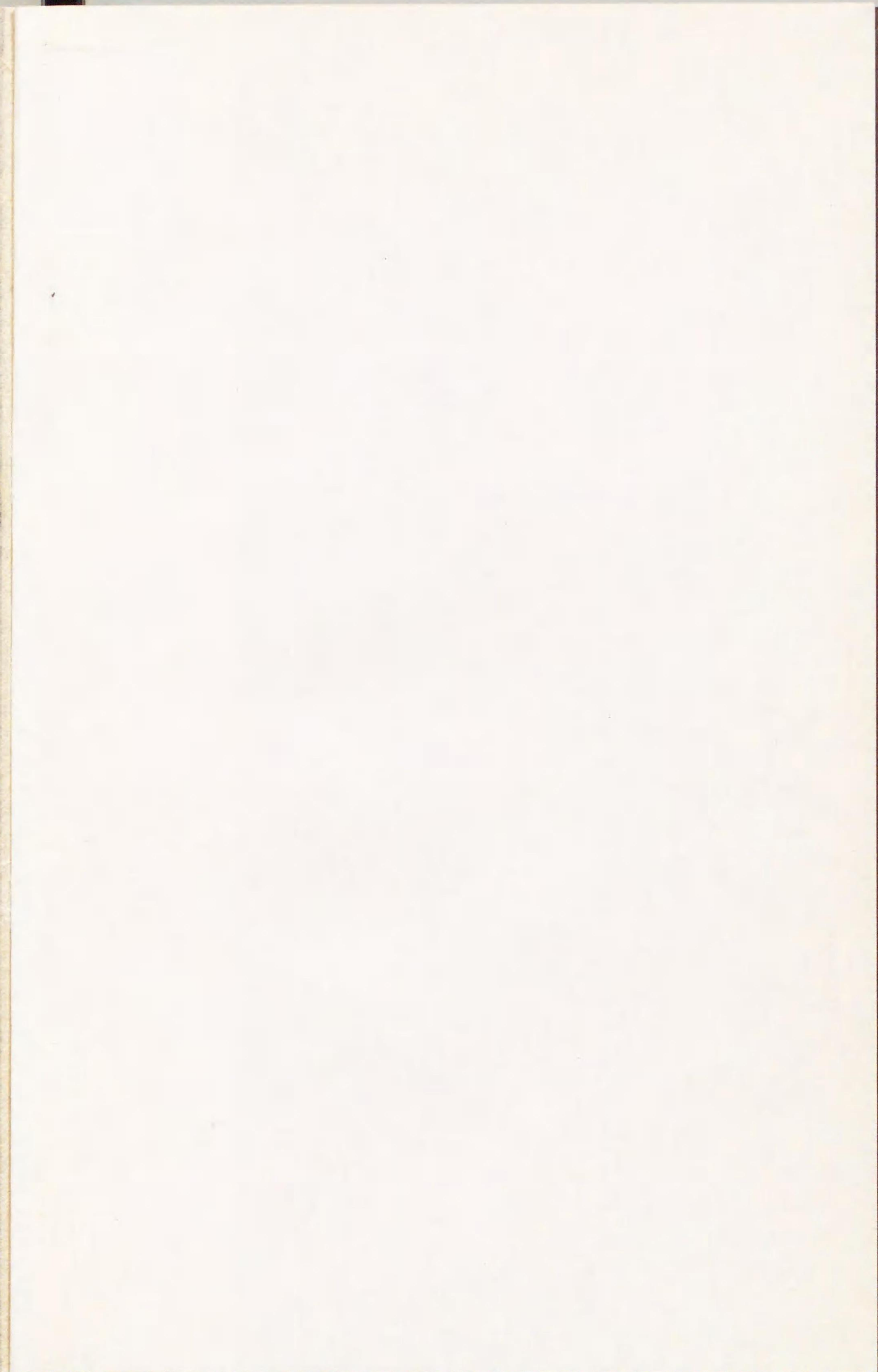


トI4X-46

昭和日本の使命

荒木貞夫

GB521
57



陸軍大臣 荒木貞夫 述

昭和日本の使命

財団法人 社會教育協會

6713521
57

良史題

史記



929214

昭和日本の使命目次

題	字「光宅天下」(著者)	一
第一、	序言	一
第二、	無差別観の誤謬	四
第三、	日本人たる自覚	七
第四、	日本精神の宣布	一六
第五、	世界と日本	二二
第六、	東亞の現状	二六
第七、	滿蒙問題の重要性	三三
第八、	朝鮮人問題	三六

目次

第九、日本人は平和の使徒……………四
 第十、昭和日本の使命……………四

昭和日本國民歌

光は東方より……………
 土井 晚翠作詩
 陸軍戸山學校軍樂隊作曲

昭和日本の使命

陸軍大臣 荒木 貞夫

第一序言

皇祖 神武天皇、征夷の鴻業を畢へ給ふや、大和の橿原に宮居を定め、先づ 天神地祇を奉齋して敬神崇宗の 聖慮を昭かにし、併せて蒼生の康寧を祈念あらせられ、茲に肇國の基幹と統治の大本を制し給うてより、皇統連綿一百二十四代、國礎は年と共に鞏く 列聖の御稜威の下に培はれたる我大和民族の志業は、日と共に旺んならんとして

ある。
心境を澄して静かに、悠久三千歳の光輝ある國史を回顧する時、吾人の胸奥には、唯々限りなき矜持と感激あるのみである。殊に、進取興國の新國是を明示し給ひ、御躬ら軌範を萬世に垂れ、親しく國民嚮導の重任に當り、皇國日本の榮光を四海に布くべき、御意氣と御力とを具現し給ふた 明治大帝の英邁、果斷の御治世以來、久しく秘められてゐた日本固有の民族精神は、愈々潑刺として生氣を放ち、今や皇國日本の姿は、恰も曉靄を破つて屹然と天空に聳ゆる富嶽の如く、その莊麗雄大なる存在を世界の前に示してゐる。この姿こそは皇國日本の眞の姿である。この姿を直視して固有の民族精神に蘇る時に、吾人は更に新たなる矜持と感激と勇氣とを想はざるを得ないのである。

然るに近時我國民の一部には、萬邦無比の國體の精華と、固有の民族精神の眞髓とを忘失し、徒らに輕佻なる外來の思潮に侵犯されて、浮薄なる利那主義的享樂のみを求追する傾向次第に顯著となり、必然的结果として、質實剛健、雄大果敢なる傳來の氣風までが、年と共に漸次消磨し去らんとする懸念すらある。此の如きは、素より無知の致すところであり、思念の不足に起因すること勿論ではあるが、所謂惡化の風潮は奔流に似て、急に善導の難きは荆棘を拂ふにも比すべきものがある。たとへ極少數者とは謂へ、全くの謬見に囚はれて、奇怪にも我が矜るべき國體を呪詛する聲すら聞くに至つては、最早識者の沈黙を容さぬのである。

吾人は、脈々として三千年の歴史を貫流する大和民族の眞精神と、

天壤と共に無窮たるべき國礎に對して、苟めにも疑ひと惑ひを有たない。さりながら、吾人は常に『最悪を豫想して、最善を盡す』用意を必要とする。

茲に昭和日本の使命に就て所懐を述ぶるのも、敢て警世の辭とする譯ではない。唯自戒の一端に資せんが爲に外ならぬのである。

第一 無差別觀の誤謬

佛者は『萬有無差別』と説いてゐる。一切の差別を撤したところに、所謂『眞如の世界』があるといふのである。この無差別觀は想念上一應は首肯出来る。蓋し『眞如の世界』とは『無の世界』であり『空の世界』であつて、無の世界に差別のあらう筈がないからである。し

かしながら、無が果して現世の實相であらうか。換言すれば、有限の世界に無があり得るか。この觀點に立つときに、端的にいふ無差別觀には大なる疑問が生じ、少くとも吾人の人生觀、社會觀には、相異なる映像が現れて來るのである。

凡そ、宇宙に存在するものに一つとして夫自身の使命を有たぬものはない。太陽を始め月でも地球でも、その他數萬の星晨でも、皆悉く一定の使命があると思ふことが出來、又我等の世界を見ても、人間には人間の天分と職能とがあり、牛馬犬猫その他すべての禽獸、草木の末に至るまで、いづれも生を享け、夫々の天分を有つてゐる。即ち飽までも無差別でないところに、夫々の存在の意義があり、價值を生ずるのである。たとへば、人間と動物とは比較するまでもないが、單に

犬だけに就て見ても狎とセツターとは同じく犬である。然し、その有する天分は全く相異なるのであつて、狎は唯愛玩用としてのみ存在價値があり、セツターは獵犬として、又番犬として獨特の天分を有してゐる。けれども若しこれを同一の環境に於て、同一の方法により、何等の差別を設けずに飼育したならば如何であらうか。恐らく數代を出てずして、夫々の特質を失ひ、遂に狎としてもセツターとしても、その天分を發揮し得ない結果に陥ることは、極めて明瞭であらう。

人間の世界に就て見ても亦同様である。その形態の上に於てこそ別に著しい相違は認められないが、人種或ひは國別の如何によつて、各相異つた天分と使命が賦與されてゐることは事實である。即ち、吾等日本人には自ら日本人たる天分と使命があり、支那人には支那人た

る特質と技能とがある。その他の各國各人また然りである。世界の各國各人が、各自の天賦を知り、各自の使命遂行に忠實であるときに、始めて世界の繁榮があり、現世が樂園化するのである。故に、吾人は日本人としての天分と使命とを充分に自覺し、すべての行動をこの確乎たる自覺の上に基調付けねばならぬ。

一切を無差別と見る思想は、事實上現世に於ては容認さるべくもない。吾人は徹底的差別觀の上に、無差別仁愛の道があると信ずる。これによりて吾人の進路を律する外はないのである。

第三 日本人たる自覺

外に於ては、依然として強食弱肉の露骨なる紛争に基く國際政情の

不安があり、所謂世界的不景氣は、旋風の如く列國の經濟を惑亂せしめてゐる。内に於ては、今尙ほ輕佻浮薄なる、功利主義的外來思想が跋扈して、彌が上にも社會不安を醸成し、一面には不自然なる生活向上——社會生活も個人生活も——によつて、自ら進んで生活難の苦惱に没入してゐる。願れば内外愈々多事であつて、吾人は今や未曾有の變局に當面してゐるのである。

この未曾有の變局に際會して、吾人は、如何にこれを處理すべきであるか。素より『勇氣』の必要であることは申すまでもないところである。しかしながら、今日のやうな非常時に際しては、單に『勇氣』ばかりでは駄目である。一切を裁斷するには、先づ透徹せる『認識』を必要とする。透徹せる正しい認識があつて、始めて右すべきか左すべきかの裁斷を下し得るのである。この最後の裁斷に方つて勇氣が伴ふのであるから、吾人は、内外自他各方面に處する方策を施設する前に、先づ夫等の各般に互る細密なる研究が肝要であるが、それにも増して喫緊の急務は、すべての客觀體に對應する『自己の認識』でなくてはならぬ。

自分自身に關する認識を缺いて、それで以て適切なる方策を樹て得る道理がなく、必然的に、その結果には満足を望み難いのである。すべての根源は、即ち自己に出發せなければならぬ。この根本問題を閑却し、忘失するからこそ、種々の錯覺にも陥り、或ひは不知不識の間に邪路に踏み迷ふことにもなる。故に、吾人は、先づ聲を大にして叫びたい。『あらゆる研究は、自己認識より出發せよ』と。

如上の見地からして、この未曾有の變局に對應すべき諸問題を研究するに際しても『我は日本人なり』と云ふ自覺を喚起することが先決要件となるのである。日本人たる自覺なくして問題の解決に當らんとするのは、恰も準繩なくして物を測るにも等しく、結局に於て妥當性を缺くことは、敢て多辯を要しないであらう。

一例を擧ぐれば、現下の滿洲事變でもさうである。元來、滿洲事變なるものは如何にして發生したのであるか？。國民はよくこの點を攻究し、そして手を拱いて再思三省せねばならぬ。

滿洲事變の發生原因については、國民の誰でもが、支那側の無法なる條約の蹂躪と、許し難い國際慣行の無視及び我が既得權益に對する非道なる侵害を擧示するのである。勿論夫等も事變發生の動因には相

違ないが、吾人をして率直に言はしむれば、今度の滿洲事變は、決して左様な末梢的問題によつて惹起されたものではない。その原因には今少し根本的なものがある。それは何であるか。即ち支那が日本を輕侮してゐたからである。

しかし、明かに世紀末的神經衰弱症狀を呈してゐる日本の現狀に對して、輕侮の念を抱いてゐるものは、單に支那ばかりではなく、殆ど世界全體が同様であると言つても差支ないのである。滿洲事變勃發直前の支那の態度は何うであつたか。滿洲事變を中心とする國際聯盟當事諸國の對日感情を見よ。蓋し、思ひ半ばに過ぐるものがあらう。

支那は國際公法上嚴として確認さるべき條約を勝手に蹂躪し、隨つて、我當然に享有する既得權は到るところに侵害され、加ふるに、純

眞なる兒童を訓育すべき小學校教科書にまで、公々と排日の教材を使用する等の暴舉を敢てしてゐる。この明々白々の事實を前にして、日本は遂に隱忍を破つた。

日本の主張と行動には一點の疚しきところなく、正々堂々、天地神明の鑒照し給ふところである。しかも、國際聯盟は、公明正大にして道義に立脚すべき機能を忘れ、久しきに互つて日本の正當なる主張と行動とを否認し、抑制せんとしたのである。この非理と沒義道とは、天下の公道を横行せんとしてゐたのである。畢竟するに、日本輕侮が全世界の一大風潮となつてゐたことは明かである。

然らば、かくの如き事態は何によつて生起し來つたのであるかといへば、答は至極簡單である。即ち、日本人が自ら日本人たる矜持を捨

て、信念を忘却し、自覺を喪失したからである。徒らに浮華輕佻なる風潮に没入して、自ら卑下した姿を世界の前に現したからである。自ら卑下するものに他の畏敬は起らない。列強を始め支那に輕視され、侮辱さるるに至つたのは、寧ろ當然の歸結と云はねばならぬ。故に日本が、嘗に滿蒙問題の對策を完成するばかりでなく、全世界に向つてその光輝ある存在を示すには、先づ以て國民全體が、毅然として皇國日本の信念と理想に目覺め、區々たる功利的觀念から脱却して、今一層高き目標に立つて進む覺悟が必要である。

若し左様でなかつたならば、假りに今日の滿蒙問題が、日本の希望する如く満足に解決したとしても、果して、それが永續するか何うかについては、頗る疑問の餘地が多い。現に國民の多數が考へてゐるや

りに、滿蒙の地を單に植民地式の經濟地域化すれば足りる位の淺薄さでは、到底何事も期待出来ないのみならず、聽ては今日の如き——否、今日に數倍する事態の發生を見るであらうことは、更に疑ひないところであると思ふ。

即ち、對支那との關係に於て、日本人の經濟的生活乃至勞働能率は、餘りにも不利であり、最初から競争にならぬといふ大きな事實がある。大連市の中樞地區にある大店舗は漸次支那商人に領有され、一般商權は固より、甚しきは日本人特有の技能であつた豆腐屋、疊屋等の營業までが、次第に支那人の手に奪はれつつあるが、之等の事實は明らかに、實生活上に於ける、日本人の地歩の敗退を意味するものである。

右様の事例は滿洲のみではない。我領土臺灣に於てさへ、日本人は支那人の商業的侵略に耐へられない状態に陥つてゐる。たとへば從來臺灣に於ける氷の卸商賣は、殆ど日本人の獨占であつたが、最近に至つてそれが次第に支那人の手に奪はれつつある。その理由を調査した人の話によれば、第一日本人の氷屋は朝寢坊で、午前八時頃でないとは起上らない。旭日三竿にして漸く床を離れた後、始めてその日の註文を電話で聞く、そして支那人を使つて必要なだけの氷を問屋から取寄せ、それを又支那人を使つて夫々註文先に届ける。その間日本人たる氷屋の主人は、午睡と遊戯と漫談に時を費し、安閑として太平樂を味つてゐるのである。しかも使用人たる支那人は、その間に一生懸命に働く、働いてゐるうちに、その商賣の骨を會得

してしまつて、臆て獨立し氷屋商賣を始める、といふことになる。商賣を始めた支那人は、先づ朝は未明に起き出で、自轉車などで市中を駈け廻り、色々注文を受けては、その足で製氷會社に立寄り、現金買で安値の氷を求め、無駄をせず注文だけで處理する。斯様な活動振りであるから、一寸の無駄がない。従つて使用人料はもとより、電話料さへ不要であり、その上すべて現金で支拂ふため氷の原價も非常に安く、更に時間的にも大變節約が出来る。そしてこの一仕事が終われば、他の一日の大部分を有効に稼ぎ續ける。これでは競争になりやうがない。かくて日本人の獨占的商賣も最近は悉く支那人に奪はれてしまふやうになつた。といふのである。

右は單なる一挿話に過ぎないが、生活競争の上に於ける日本人と支

那人の比較は比々皆然りと稱するも過言ではない。斯様な實狀から見て、日本に於ける從來の大陸論なるものを検討すれば、その悉くが、一種の空論化するるのである。

思ふに日本の大陸政策なるものを考察する上に於て、小我的功利主義は、第二義的のものでなければならぬ。即ち、日本の大陸政策には、今一段と高き目標がなければならぬのである。滿蒙に於ける經濟的發展の如きは、要するに附隨的のものである。日本を救ひ、東洋を救ひ、而して世界をも救ふための大陸發展である以上、吾人はこの際非常なる決心を要する。

この高き目標に向つて躍進する前に、先づ以て『日本人たる自覺を喚起せよ』と要求する所以である。

第四 日本精神の宣布

己おのれを知り敵を知る事が、戦勝せんしょうの秘訣ひけつである。これは萬事ばんじに適用てきようさるべき大原則だいげんそくであつて、己おのれを知らずしては、遂つひに何事なにごとをも爲なし能あたはぬのである。日本にほんが今日の難局なんきよくを切抜きりぬくる方途ほうとも、結局けつぎよく日本國民にほんたうみんの全部ぜんぶが、徹底的てつていに、完全くわんぜんに日本人にほんじんたる自覺じかくを喚起くわんきするより外ほかにはあり得えないと思しんずる。即ち、日本人にほんじんが、正しく日本人にほんじんたる自覺じかくを得たときに、始めて日本にほんの飛躍ひやく的發展てんぱんが期待きたいし得られるのである。然らば、日本人にほんじんの自覺じかくの對象たいしやうとなるべきものは何であるか？。日本にほんの眞の姿まがたは何であるか？。それは日本建國にほんけんこくの始めに當つて、天照大御あまてらすおほみ神の下し賜たまはつた三種さんしゆの神器じんぎによつて表明へうめいさるるところの大理想だいりさうに

外ほかならぬ。日本國民にほんたうみんの何人なんびともが尊崇そんすうし、感銘かんめいするやうに、

鏡かがみは 公明正大こうめいせいだいを象徴しやうちやうし

勾玉まがたまは 仁愛じんあいを意味いみし

劔つるぎは 勇斷ゆうだんを示現しげんする

即ち 三種さんしゆの神器じんぎによつて表明へうめいさるる公明正大こうめいせいだい・仁愛じんあい・勇斷ゆうだんは、我建國わがけんこくの大理想だいりさうであつて、畏おそれも 天皇御躬てんわうおんみづからの道みちとされ給ふところである。

神代以來かみよらい天皇てんわうの道みちは、誠まことに昭々せうせう乎ことして明あきらかである。これが、所謂いはゆる眞まことの『皇道』くわうだうでもあるのであつて、日本にほんの歴史れきしは取りも直たださず、この『皇道』くわうだうの輝かがやける記録きらくである。

皇道くわうだうは坦々たんたんたり矣や。この道みちを守り、この道みちを輝かがやかし、而しかしてこの道みちを進すすむ。これが臣子しんしたる日本國民にほんたうみんの理想りさうであり、本分ほんぶんでなくてはなら

ぬ。君民一體、上下協力、そして高き理想の下に、日に新たに、日に日に新たなる營みを爲す。我國體の精髓は實に茲に存するのである。斯くて日本人たるものの使命は、自ら明らかなつて来る。何等の惑ふところはない。皇謨を扶翼して 皇威を輝かすこと、ただこの一點に歸着するのである。これがためには私を去りて公に就く事が肝要である。小忠を措きて大忠に殉ずる事が大本である。一個の忠節に潔くするのみでなく、正國安人の大忠に身命を捧ぐべきである。

日本國民が、如上の眞個の日本精神を把握し、その眞個の使命を自覺するに至れば、國民の意氣は期せずして旺盛となり、國力の伸張と發展とは期せずして待望さるるに相違ない。しかし、日本國民の全體が、大悟一番してこの大理想を、四海に布くだけの血の躍動を覺ゆる

やうにならなければ、到底今日の難局を處理することは出来ない。この燃ゆるが如き旺んな意氣を示し得なければ、滿蒙問題の根本的解決も、大陸政策の遂行も、必然的に不可能に終るであらう。

遠き歴史は姑らく措いて、明治以來の事實だけに就て見ても明瞭である如く、日清戦争でも日露戦争でも、また日獨戦争でも、すべての對外戦は、皆この大理想の下に堂々と起されてゐる。さればこそ日本の態度は、悉く世界から是認されたのである。斯くて日本の國威は發揚され、日本の國力は今日の伸張を見たのである。もしこれが、單なる利害觀念に出發し、所謂切取強盜式の奪略戦であつたらどうであるか。恐らく世界萬邦の指彈を受け、結局に於ては期待に反し、却つて自ら窮地に陥りて窘迫を餘儀なくされたであらう。歐洲大戦當時に於

けるドイツの状態は、この間の道理を明瞭にする活きた例證である。古來日本の強味は、斷じて悪と不正を容認しないところにあつた。即ち、常に理想と道義に遵由して、決して進止を誤らぬところにあつた。然るに最近の世相を見るに、如何にも憂慮に堪へぬものがある。勿論、國民の一部ではあるが、矯激なる外來思想に侵犯されて、或ひはマルクス一派の所論に追隨し、半熟なる唯物主義に囚はれて、動もすれば日本の尊貴と、日本人としての使命と天分を忘れ、或ひは浮薄なる享樂主義を渴仰して遊惰と安逸に耽り、沒理想、無自覺の中に、自分自身を亡ぼさんとする徒輩さへ見るのである。靈能を無視して人間を機械化し、理想と自由を奪つて奴隸の社會へと退轉せしむる唯物主義と、意氣と力とを排斥する享樂主義が、共に健全なる社會の毒素

であることは、今更贅言を要せぬところであつて、殊に、日本の傳統を信じ、日本精神の迫力を感じずる吾人は、國民の全部が一人の例外なしに、速かに悪夢から醒め、崇高なる大理想の下に團結して、光輝ある皇道宣布の使徒たらんことを切望して已まぬのである。

第五 世界と日本

翻つて、世界に於ける日本の地歩を考察して見るに、維新開國の大變革によつて、日本の眞の姿を世界に光被して以來、常に正義に立脚し、平和のためには一切を擲つても辭せざるの覺悟を以て、場合によつては堂々と實力を示すの意氣を示し、すべての邪惡を排除するに聊かも躊躇しなかつた結果、僅かに開國五十年を出でずして、よく世界三

大強國の一たる實を示した。これ、一に 皇天の御稜威の然らしむるところではあるが、維新以來、國民の意氣が旺盛であつて、何等の迷ふところがなく、唯々 皇謨の扶翼に粉骨碎身の至誠を披瀝したがつたに外ならない。

皇謨を扶翼することは、即ち、大日本の大理想を實現することであり、そのために粉骨碎身することは、確たる『日本國民としての大乗的自覺』が、國民全般に燃えてゐたからである。然るに、最近に至つては、此の烈々たる國民的意氣が次第に消磨しつつある。悲觀的に言へば、急角度の沈下状態を示してゐる。

試みに、現代社會の各層に漲る浮薄なる風潮を見よ。資本家は資本家で、ただ打算と功利にのみ走つて、社會全般の康安を顧みず、政治

家は動もすれば黨利黨略に駆られて國家の大局を忘るるに至り、サラリーマンも學生も一步誤れば本分を抛擲して、その日の安逸と享樂を求めんとする状態で、敢て次の時代を顧念しようとしないのである。一言にして盡せば、舉世滔々として輕佻に流れ、功利主義に惑溺して何等の氣礪なく、意氣なく、抱負なく、理想がないのである。此の如き状態を放任して置く結果を想ふときに、何人か國家の前途に寒心せぬものがあらう。否、それは將來のことではない。既に現前にその災殃は明示されてゐるではないか。

即ち世界に於ける日本の孤立といふ、悲しむべき一大事實である。國民は、國民が安閑としてゐる間に、日本の國際地位が、何時の間に孤立に陥つてゐることに思ひ到らなければならぬ。何故に、左様な

悲境に陥つたかについて、深く省慮する必要が迫つてゐる。然し原因は簡単である。言ふまでもなく、日本人が日本人たる自覺を缺き、皇國日本に對する正しい認識を忘れたからである。その結果として、國民の意氣が衰へ、氣礪が消磨し、政治も思想も、只々當面を處理するだけのその日暮しとなり、無力となり、遂には自ら輕侮し、自棄的の混亂に陥つたのである。

建國の大精神を忘れ、日本國民たる矜持を抛擲して、一體日本に何が残るであらうか。すべての災殃は、この間隙に乗るのである。日本が世界の輕侮を招き、支那の侮辱を受くるに至つたのは、畢竟するに、日本自身の罪に歸着する。滿洲事變はかくして發生し、國際聯盟を中心とする全世界の包圍的攻勢は、かくして馴致されたものである

ことを三思せよ。

繰返して言ふ。現今の滿洲事變は、單に條約の蹂躪とか、權益の侵害とかいふ末節的の問題によつて發生したのではない。日本が支那から輕侮されてゐることが根本の原因である。國際聯盟等が、理非を辨別しなかつたのも、要するに、日本を輕侮してゐる證據である。故に、全世界の輕侮を招いたことが、日本を國際的孤立に陥らしめたところの直接原因であり、それが結局、日本國民自身の罪であることは、最早説明を要せずして明瞭であらう。

日本國民は如上の道理を明確に悟得せねばならぬ。日本國民がこの道理を明確に悟得したときに、始めて今日の難局は打開されるのである。このときに當つて滿洲事變の發生したことは、誠に天の攝理であ

つて、天が日本國民の覺醒を促すために亂打する警鐘とも聞くべきである。吾人は決して今日の難局を悲觀しない。今日の國際的情勢は、國民が建國の大精神に甦り、日本國民たる意氣を發揮しさへすれば、立ちどころに好轉せしめ得るのみならず、聽ては、萬邦をして、我皇道を欽仰せしめ得る日の到來すべきことを、強く固く信じて疑はないのである。

第六 東亞の現狀

我建國の眞精神と、日本國民としての大理想の、渾然たる融和合一の示現とも稱すべき『皇道』は、その本質に於て、四海に宣布し、宇内に擴充すべきものである。故に、これが支障となるところの、あら

ゆる事實は、實力を使用しても、斷乎として排除せなければならぬのである。茲に於て吾人は、一應東亞の現狀を検討して見る必要を感じずる。蓋し、吾人の施設は先づ直接せる四周を對象とするからである。

然らば、東亞の天地は今、如何の狀であるか？

接壤の國支那は、過去二十年間禍亂相次いで、未だに統一的の中央政府すら有せず、全く國家としての實體を具へてゐない。印度はイギリスの壓制下に、三億の民衆塗炭の苦を嘗め、今や重大なる危機にさへ直面してゐる。沃野千里の中央アジア、無限の寶庫シベリヤは共に鷲爪に奪略されて、自由の片鱗すら仰ぐことが出來ず、平和郷蒙古も亦、第二の中央アジア化してしまつた。斯くて、東亞大陸に獨立國の體面を保持するものは、我國を除いては、僅かにシヤム王國あるのみ

である。而もここすら四隣の脅威常に絶えずして、容易に国力の伸張を期し難い状況にある。

かくの如き東亞諸國の現状に對して、自他共に東亞の盟主と許し、その實力を有するのみならず、皇道を宣布してこれが救護に當るべき本來の使命を帶ぶる。皇國日本は最早これを放任傍視する譯には行かぬ。正義のためである以上は、たとへ国力を傾くるも、敢然と起たなければならぬ。孟子の言にも『二者兼ぬるを得ざれば、生を捨てて義を採るのみ』とある。吾人は如何なる場合にも、この突き詰めた信念を以て、正義のために闘ふ覺悟を必要とするのである。

イギリスは、紳士道の國と言はれてゐる。而も印度の自治運動が、年と共に熱度を帯びつつあるのは、如何なるものであるか。アメリカ

は正義と人道とを標榜してゐる。しかしながら、その對外政策を檢討してパナマ、ニカラガ、キューバ、メキシコその他中南米諸國に於ける諸施設に及ぶとき、如何なる所感かある。その他國際場裡に於ける各國文化を仔細に觀ずれば、そこには些かも皇道の匂ひがない。

東亞の諸國は、白色人種壓迫の對象となつてゐる。覺醒したる皇國日本は、今日以上に彼等の横暴を許容することは出来ない。いづれの強國の行動と雖も、皇道に則せぬ限り、斷じてこれを排撃するのが皇國日本の任務である。

この意味に於て、東亞の何れの地點に於ける禍亂の發生も、日本としては黙視することが出来ないのである。蓋し、平和の破壊は絶対に皇國日本の大理想と合致せぬからである。故に禍亂の發生、平和の破

壊に對しては、日本は實力に訴へても、徹底的にこれが鎮靜を期するだけの覺悟が不斷に必要である。この覺悟と實力さへあつたならば、所謂傳家の寶刀を抜くまでもなく、平和は招徠し得るものと信ずる。不幸にして、支那が未だに、日本の眞意と實力を諒解せず、徒らに歐米の列強に頼り、依然として以夷制夷、遠交近攻の技術的外交政策を弄し、年と共に自ら不利に陥りつつあるのは、誠に悲しむべきことである。日本を目して侵略武斷の國と做すのは、曲解に非ずんば皮相の見である。日本は日本本來の理想、即ち平和實現のために、懸命の努力を拂つてゐる以外に、何等他意を含むものではないのである。滿洲事變のために武を用ふることも、即ち、一殺多生破邪顯正のための非常際の降魔の劍を揮ふことに外ならぬのである。

第七 滿蒙問題の重要性

滿蒙問題の重要性は、今更、事新らしく説くまでもなく、滿洲事變發生以來、各方面に於て高調力説されてゐるから、最早國民の頭には充分浸潤してゐるに相違ないが、この場合、特に國民の注意を喚起したいのは、滿蒙の地が、我皇道宣布の大道關門として、最も重大なる意義を有つてゐる一事である。

世の多くの人の説くやりに、日清、日露兩大戦争の舞臺であり、十萬の生靈と、二十億の國帑を擲つたといふ、深刻なる歴史的因縁もある。又現に、約百萬人の同胞（内地人二十萬、朝鮮人八十萬）が在住し、滿鐵その他に對する投資額は十五億圓以上に達する經濟的關係

もあり、更に、内地の人口問題、食糧問題、重工業原料問題等より、延いては国防上の問題に及び、帝國の存立と滿蒙の問題とが、極めて至密の關係にあることは事實である。しかしながら、それ等の諸問題を解決することも、勿論重大であるには相違ないが、要するにその何れもが第二義的のものである。

吾人が、滿蒙問題を重視するのは、やはり、滿蒙の地域に對して確固たる威信を樹立して置かなければ、頻々として極東の平和を攪亂され、延いては帝國の存立を脅威されぬまでも、三千年の歴史を貫流せる大理想を展ぶるに由なく、求めて天意に抗する結果に陥ることを懸念するからである。

日本は、日本だけの平和と繁榮を守るだけで満足すべきではなく、

更に東亞の天地にその理想を展べ、更に更に廣くこれを世界に及ぼさねばならぬ。この大理想は、皇祖神武天皇東夷御親征の大業を畢へさせ給ひ、大和の橿原に地を相して、中外統治の礎地を定められたるべき、既に

上ハ則チ乾靈國ヲ授クルノ徳ニ答ヘ下ハ則チ皇孫正ヲ養フノ心ヲ弘メ然ル後六合ヲ兼ネテ都ヲ開キ八紘ヲ掩ウテ宇ト爲ス

と宣はせられてゐる。而してこの六合を兼ね八紘を掩ふところの大理想は、即ち、神徳に答へ、正を養ふの心を弘むることであつて、爾來一貫せる我皇室の御目標であらせられたのである。列聖亦尊慮を茲に潛め給ひ、衆庶相倚つてこれを扶翼し奉り、茲に萬邦無比の國體が形成され、君臣和樂の國土が出現して今日に及んでゐる。

しかも、東亞の現状は何うであるか。世界の形勢は何うであるか。正に、日本の起つべきことを要求してゐるではないか。

滿洲事變はこの意味で大きな意義があると思ふ。日本は天の啓示に基いて、既に初一步を踏み出したのである。そして皇軍の向ふところ、實力の及ぶところ、そこには平和があり安寧がある。皇軍は徒らに武を用ふるものではないが、平和と正義のためには已むなく又に戦らねばならぬ。それは理想を實現する上の必要手段であるからである。

次に吾人は遠く蒙古を思はねばならぬ。一體今日の蒙古とは如何なる地域であるか？ 支那の領地か——ロシアの領土か——それとも獨立國であるのか。恐らく世界中で何人もよく答へ得るものはあるまい。そして支那自身に於ても確言することは出来まい。東亞の和平を大問題

とするならば、先づ以て蒙古の意思を明確にして置かねばならぬ。

日本は日本の勢力圏に接觸して、蒙古の如き曖昧なる地域の存在することを欲しない。蒙古は飽迄も東洋の蒙古として、それに獨立と平和と安寧とを與へねばならぬ。他國の侵略に委すが如きは、以ての外である。蒙古を曖昧にして置くことは、聽て東洋禍亂の因子となる。

蒙古問題は日本の皇道宣布の上に、寧ろ滿洲問題よりも、遙かに大きな障害となるかも知れぬ。而して、苟くも皇道に敵するものあらば、その何たるを問はず、斷乎として排除すべき意志を、茲に率直に明瞭にして置く必要がある。

更に、吾人は滿洲及び蒙古に對すると同様の態度を以て、東洋平和のために、隣邦ロシアの對極東の諸般の行動に對して吾人の理想と使

命遂行の聖業を顧るとき、「ウラヂウオストーク」(極東占領の露語)の依然たる名稱の儼存するを想起して、無關心たる事を得ぬ感を深くするるのである。

第八 朝鮮人問題

東洋の平和を確保することは、皇國日本の傳統的國是であつて、日本はこれがために、幾度か國運を賭するの大決心を示した。日清戦争然り、日露戦争亦大いに然りであるが、彼の北清事變に参加したのもそれがためであり、近くは聯合國と共にドイツを膺懲したのも、日本としては、先づ東洋の平和確保が第一義的の目的であつたのである。繰返して言ふやうに、東洋の平和を確保するといふことは、我皇

道宣布の保證を意味するのであつて、啻に明治以來數度の外征が、それがために敢行されたのみならず、内外に互る萬般の施設は、悉くここに基調を置いてゐるのである。而して朝鮮合邦の眞精神も亦實にこの點に存するのであるが、時を経るに従つて、この眞精神が兎角忘れられんとしつ々あるのは、吾人の最も遺憾とするところである。

韓國合邦の勅語には何と仰せられてあるか

民衆ハ直接朕カ綏撫ノ下ニ立チテ其ノ康福ヲ増進スヘク産業及貿易ハ治平ノ下ニ顯著ナル發達ヲ見ルニ至ルヘク而シテ東洋ノ平和ハ之ニ依リテ愈々其ノ基礎ヲ鞏固ニスヘキハ朕ノ信シテ疑ハサル所ナリ
神德無邊 明治大帝の大御心は、右の一節を拜誦しても、充分に感得することが出来るのである。

歴代の爲政家は、果してよくこの聖旨を奉戴してゐたであらうか。勿論、朝鮮地内に於ける諸施設は、年と共に改善されて、民衆の幸福は日に月に増進されてはゐるが、そこに大きな忘れ物のあつたことに気が付かなかつた。即ち、在滿朝鮮人の問題である。

滿洲に在住する朝鮮人は均しく陛下の赤子であり、我等の同胞である。而してその数は八十萬乃至百萬人にも及ぶ大衆であるのに、今日迄全くその存在を閑却されてゐたのである。彼等は暴虐極まりなき支那官憲の壓制下にその生活を脅威さるるばかりでなく、その生命すら常に危険に曝されてゐた。而も彼等は均しく帝國の臣民でありながら、長年の間、皇澤に浴することが出来なかつたのである。

この事實は、吾人に何を考へさするか。安住の地すら求め得ずして

風塵の如く漂々乎として、無辜に泣く百萬の大衆を前にして、何等の責任を感じずに、そのまま放任しておく法はない。日鮮の完全なる融合が、東洋平和の基礎である。彼等を撫育し、彼等に活力を與へ、共に將來を約するだけの施設を忘れてはならぬ。否らざれば、遂に日鮮合邦の大精神も亡びるであらう。

滿蒙對策もただ鐵道問題や、鑛山問題や、或ひは各種の經濟的利權の獲得だけで、能事畢れりとなさば大間違ひである。從來これ等に關連する權益の主張のみに熱中してゐたからこそ、列國の猜疑を招き、國際的に孤立無援ともなつたのである。吾人は今度の滿洲事變を機會に、日本の主張と行動は、唯々人道と平和の上にあることを、事實の上

に明瞭ならしめねばならぬ。

尙、東部シベリヤに在住する朝鮮人の數も亦數十萬の多きに達し、彼等の境遇は更に悲惨なるものがある。吾人はこれ等に對しても、在滿鮮人に對すると同様の眞摯なる考慮を拂ひ、臆て、最も有效適切な救済の方法を講ずる必要あるべきを痛感する。蓋し、朝鮮民族の不幸を傍觀し、慘狀を坐視することは、日本人としての傳統と感情がこれを許さぬからである。

第九 日本人は平和の使徒

日本は古來『武の國』である。さりながら同時に、嚴に瀆武を戒しめてゐる。茲に日本の本來の面目を窺ふことが出来るのである。徒らに武を用ふるのは暴であり、暴は即ち亂である。暴に走り、亂に陥れ

ば、平を失する。平を失すれば臆て道に反することになつて、正しきを守るべき武の本質を瀆するのである。故に日本に於ては未だ曾つて、武を濫りにしたことはないが、さりとして武を粗かにしたことがない。正道を拓き、仁愛を布くところの 皇道の精神を強く意識するからである。

日本を目して『武斷主義の國』と見做し、或は『侵略主義の國』と稱するのは、全く皮相の見解であつて、日本の武は只管平和を求むるためにのみ用ひられてゐる事實を知らぬ者の言である。日本が如何に平和を愛好し、如何に人類の安寧と福祉とを熱求してゐるかは、列聖の詔勅中至るところに高調されてある通り、極めて明々白々であるが、日本はこの大理想を達成するためにこそ、武を尙ぶのである。

日本國民は、無批判に、歐米の文化に惑溺して、傳來の日本精神を滅却してはならぬ。輝かしき三千年の歴史と、これを貫く大精神を體得して、皇道宣布のためにただ一途に直進せねばならぬ。そこに永遠の生命があり、平和の使徒としての榮光があるのである。

唯物論的邪道を排撃せよ。享樂主義的風潮を一掃せよ。又更に狹量なる小乘的忠誠愛國に偏する勿れ。而して冲天の氣礪を以て、大乘の大忠大愛國精神を以て、毀譽褒貶の外に立つて萬事に對處し得るだけの大度量がなければならぬ。

曾て、フランスはプロシヤのために一敗地に塗みれ豊饒なるアルサス、ローレンの二州を奪取されたるのみならず、五十億フランの賠償金を賦課されて、一時はその再起すら疑はれたことがある。し

かしこの屈辱に憤激したフランスは、一意國民の團結と、士氣の振作に努めた結果、五十億フランの賠償金の如きも、『敵國の負債を有するは、フランス國民の最大の恥辱だ』といふので、十ケ年の期限が與へられてあるにも拘らず、僅か三ケ年を以てこれを完済し、環視の列國を驚倒せしめ、流星の鐵血宰相ビスマルクをして、畏怖長嘆せしめたものである。爾來フランスは舉國一致精神力を總動員して、國力の復興を計り、雪辱の日を待つてゐたが、偶々歐洲大戰の勃發に際し、再び干戈を執つて、仇敵國ドイツと相見ゆることとなつた。そして戦争の初期に於ては、機械文明の優れたドイツの旗色が良かつたが、物質力の盡くるときは即ち敗亡の時であつた。これに反して精神力を以て、固く團結したフランスは、敗けても敗けて

も折れはしなかつた。斯くて偉大なる精神力は、物質力を壓倒し、遂にフランスはドイツに勝つたのである。更にフランスは、戦争中殆ど領土の大半を敵騎のために蹂躪されて、耕地は荒廢に歸し、都市は破壊され、その經濟力は一時全く壊滅に等しい慘狀を呈したが、それも束の間であつた。驚嘆すべきフランス國民の意氣は、再び國力復興の上に示されて、大戦後十年を出でずしてアメリカに次ぐ富裕國となり、戦前にも増した繁榮ぶりである。

吾人はこの一事例を見ただけでも、如何に精神力が偉大であるかを痛感せずにはゐられない。物質は頼むに足りない。萬事を解決するものは結局、鋭い精神力であり、旺盛なる意氣であり、又大局に即せる大抱負である。小乘的感情に墜ちず、大乘の大精神に立つ所にある。

人口問題も重要である。食糧問題も輕視することは出来ない。國際問題素より然りである。然しながら、それ等の一々について、無暗に憂慮し、恐怖することは避けねばならぬ。日本國民は今一段と高所に立つて、自己の進むべき方向を、考察する必要がある。かくて、自己本來の使命と任務を確認するとき、すべての問題は自ら氷解するのである。

第十 昭和日本の使命

遠く建國の大精神を憶ひ、深く國民的信念に目覺むべき時が來た。吾人は時局が多難であれば多難である程、愈々益々意氣を振つて、これが打開に努力せねばならぬ。

畏くも 今上陛下踐祚の始めに方つて宣はく
 輓近世態漸ク以テ推移シ思想ハ動モスレハ趣舍相異ルアリ經濟ハ時
 ニ利害同シカラサルアリ此レ宜シク眼ヲ國家ノ大局ニ著ケ舉國一體
 共存共榮ヲ之圖リ國本ヲ不拔ニ培ヒ民族ヲ無疆ニ蕃クシ以テ維新ノ
 宏謨ヲ顯揚セムコトヲ懋ムヘシ
 眞に思想混亂し、勞資相鬭ぐの世相の現狀に鑑み、國民は深く内に
 省み、宜しく舉國一致眼を大局に注いで、大乘的大忠に志し、國本の
 培養に努むると同時に、國民の無限の繁榮を期し、以て 聖慮に應へ
 奉らねばならぬ。而してこの覺悟こそは、所謂昭和維新の基調をなす
 ものであり、この基調の上に日に進み、日に新たなる我國是を伸べ、
 正に四方に會通して、大いに民心の更張を計るべく、かくして昭和維

新の大業は展開するのである。

明治、大正の兩時代を通じて、漸次に興隆したる、國民的意氣を紹
 述して、更にこれを建國の大精神と合致せしめ以て 皇道を四海に宣
 布する、これが昭和日本の眞使命である。

力の乏しきを憂へてはならぬ。況んや物質をやである。すべては氣
 礎である。意氣がすべてを解決する。皇國日本の進路を阻むものがあ
 ったならば、その何者たるを問はず、斷乎として排撃すべく、一步も
 假借することを許さぬのである。

同胞よ！ 東亞の風雲が何うであらうとも、將た世界の空氣が如何
 に險惡であらうとも、敢て悲觀するを要せぬ。而して又末梢的感情、
 小乘的小忠によりて自己陶醉に甘んずる勿れ。

忠經に『夫れ忠は、豈惟君に奉じて、身を忘れ、國に殉じて、家を忘れ、色を正しうして、辭を直くし、難に臨んで節に死するのみならんや。沈謀潛運、以て國を正しうし人を安んずるにあり』とある。國を正しうし人を安んずる事、即ち我が肇國の大精神の意義の内に躍如としてゐる。一殺多生、三種の神器の劍の徳を輝かして大理想に進むべきである。

見よ！ 昭和日本の前途には陽が輝いてゐる。

(終)

昭和日本國民歌

作詩 土井 晚 翠
作曲 陸軍戸山學校軍樂隊

光は東方より

陸軍戸山學校軍樂隊作曲

Tempo di marcia.

神 聖 ジ ー ム ヴ ガ コ ー ツ

ニ ホ ン ノ モ ト キ タ テ テ ヨ リ

レ ン メ ン ト シ ラ ツ タ ワ レ ル

ニ ー セ ン ヨ ネ ン ノ テ イ ロ ク ヨ 皇

三

統 ヒ ト ツ ノ ケ

ニ ン テ イ ツ

ビ ャ ク ニ ヅ ウ シ ガ イ

カ ソ フ

二

光は東方より

荒木陸相の論文「昭和日本の使命」を讀みて

土井 晚翠

一

神聖神武 わが皇祖、
 日本にの基もと 建ててより
 連綿れんめんとして 傳つたはれる
 二千餘年せんの 帝國ていこくよ、
 皇統くわうとう ひとつの系けいにして

一百二十四、 代算だいざんふ。

二

明治めいぢ 大正たいしやう さきさきに たち、
 昭和せいわ 續つづきて 新あらたなる
 使命しめい 東ひがしの空そらに 曙あけぼのけ
 妖霧えうむ 掃はらひて 瞳とら々と
 昇のぼる 旭日あさひの旗はた風かぜに
 まづ 滿蒙まんもうの草靡くさなびく。

三

世界せかいの陸りくの 三さんが一、
 四千萬方せんまんばうキロメータ、

光は東方より

世界人口の半越す
十億の民大亞細亞、
亞細亞一つに結ぶとき
普天の下に敵あらじ。

四

皇道廣く施して、
四海の幸を求むべき
理想に盡すわが使命、
鏡と玉と劍との
三種の神器いや高き
わが象徴の尊しや。

五

鏡は照す身の誠
玉と劍は仁と勇、
恩威ひとしく萬邦に
垂れて榮と平和とを
内と外とに來すべく、
わが任重し道遠し。

六

ああ光明は東より
光めざむるあけぼのの
太平洋の波の上

日本にほんの富士ふじを仰あふぐとき
希望きぼうはつねに若わかやがむ
四海しかいの平和へいわわが理想りきよう。

昭和七年一月二十四日朝

昭和七年二月八日印刷
昭和七年二月十一日發行
昭和七年四月一日第八十版

民衆文庫〔第六十篇〕

特輯・定價金十五錢

送料二錢

著者

荒木貞夫

編輯者兼
行輯者兼

財團法人
社會教育協會代表者
小松謙助

東京市小石川區白山御殿町百廿七番地

印刷者

竹内喜太郎

東京市牛込區榎町七番地

昭和日本の使命
不許複製

發行所

東京市小石川區
白山御殿町二二七

財團法人

社會教育協會

電話小石川七五〇九番
振替口座東京二一八三番



トI4X-46

財團法人 社會教育協會

